

応神王朝から継体王朝へ

橋本 和子

継体天皇の即位の事情を話すためには、応神王朝から説明しなければなりません。

先ず、応神王朝で良いにつけ悪いにつけ、活躍が目立つのは雄略天皇である。四七九年、武（雄略）が宋の順帝に国書を差し出したときの一節を紹介する。祖先の王たちが自ら武装して軍隊を率い、日本列島の東国、西国を平定し、さらに朝鮮半島の国々をも従えたというもの。

昔より祖禰（そでい）みずから甲冑をつらぬき、山川を跋涉し、寧処弑いとま非ず。東は毛人を制すること五十五回、西は衆夷を制すること六十六回、渡りて海北を平らぐる事九十五回。

神功皇后 応神天皇の母（息長帯比売 おきながたらしひめ）

応神天皇 確実に実在が認められる最初の天皇である。（ホムタワケの命）

そのあと、**仁徳、履中、反正**と続く。

雄略天皇の父親である允恭天皇

允恭天皇の功績としては、くかたちを行い氏姓を正したことである。勝手に良い姓を名乗っている氏族をくかだちをやり、おどかして正しい姓を名乗らせたのである。

允恭天皇が亡くなると皇位継承の争いがおこった。

安康天皇

安康は位につくとすぐ、幡梭（はたび）皇女を弟の雄略の妃にしようとして、皇女の兄の大草香皇子に申しでた。ところが、使者にたった坂本臣の根臣という人物が絡んでその話がこじれてしまった。大草香皇子は快く応じ、押木のたまかづらを結納のしるしに根の臣に渡したが、この押木のたまかづらが大そう美しかったので根の臣はこれを自分の懐に入れ、盗んでしまった。安康には嘘をいい、大草香皇子は承諾しなかったと伝えた。安康天皇は怒って大草香皇子を殺し、しかもその妻の中帯姫（なかしひめ）を奪って妻とした。姫の連れ子である眉輪王は、父を殺され、母を奪われた怒りから安康天皇の寝首をかいて殺してしまった。

ここで雄略は皇位継承の争いにたちあがる。安康殺害事件のあとで、眉輪王をたおそうとした。ところが眉輪王は葛城氏の圓大臣（つぶらのおおみ）に助けを求めて対抗しようとした。葛城氏は天皇家と対立するほどの勢いを持っていたからである。しかし雄略は大臣の家を焼き、大臣と眉輪王を殺した。その時大臣は娘の韓姫を雄略に献じた。この韓姫が生んだ皇子が清寧天皇である。

雄略はこうして眉輪王を滅ぼしたが、まだ帝位に着くことはできなかった。それは安康が生前、履

中の皇子で葛城氏の娘の黒媛を母とする市辺押羽皇子に位を伝えようとして亡くなった関係上、この皇子の方が有力であったからである。この皇子を滅ぼすことによってはじめて皇位をかちえたのであった。

雄略天皇の対朝鮮半島活動

雄略八年（四六四）日本軍が高句麗を破り雄略九年に新羅に攻め込んだが將軍の紀小弓が戦死してしまい敗走した。雄略二十年（四七五）に高句麗が百済の漢城を攻めた。蓋鹵王（がいろおお）をはじめ、王妃、王子たちが殺されてしまう。高句麗王は「百済の国は日本国の宮家としてきた。百済の昆支王は、日本に行き天皇に仕えた」と言い、高句麗は百済を滅ぼすことを一時止めた。二十一年雄略は百済が高句麗のために滅ぼされたと聞き、任那から久麻那利（熊津）の地を百済の文洲王（モンコン）に与えて復興させた。朝鮮半島の戦乱の結果、百済系渡来人が多数来朝した。

雄略二十三年（四七九）、百済の三斤王が亡くなると、入質していた昆支王（こんきおう）の次子末多王に筑紫の兵五百（沢山という意味）を付けて帰国させ、百済王として即位させた。

雄略の妃の稚媛（わかひめ）について

吉備勢力に吉備上道臣田狭（きびのかみつみちのおみたさ）という人物がいた。田狭は美人の稚媛を妻として二人の息子があつた。田狭は宮中で稚媛が美人であると自慢話ばかりしていた。それを聞いていた雄略は稚媛を奪おうとして、田狭を朝鮮半島の任那の国司として任じて追っ払い、稚媛を奪い妻とした。ところが田狭は任地でこのことを聞くと、天皇を恨み、新羅に通ずるにいたつた。そこで雄略天皇は田狭の息子を將軍にして新羅を討たせようとしたのであるが、息子が任地に着くと父の田狭は息子に朝廷への反逆を進めた。

雄略は死に臨んで（雄略二三年、四七九年）大伴室屋達に伝えたという遺詔がある。それによると、雄略は死に臨んで星川皇子（兄に同母の磐城皇子がいる）がその母の実家の吉備上道臣と結んで次の皇位をねらっていることを恐れていた。そこで皇太子の清寧の地位の安泰を室屋達に託したのである。吉備氏は大和王権にとって、警戒すべき勢力であつた。清寧天皇は雄略が葛城氏の圓大臣を滅ぼした時、大臣がたてまつつた韓媛を母としている。葛城氏の勢力が健在であれば、星川皇子等を滅ぼさなくてもよかつたのであろう。大伴室屋が雄略朝に築いた勢力の強さが示されている。

このような事情があるので雄略天皇は田狭からとりあげた稚媛と雄略の子である星川皇子に勢力があるのを恐れ、意中の清寧の即位を室屋に託したのである。

雄略天皇が死ぬと、はたして稚媛は星川皇子たちをそそのかし反抗させるが、室屋達に滅ぼされてしまう。雄略天皇には三人の皇子がいたのに、このようなわけで清寧だけが残り、即位するが清寧もまた短命に終わる。雄略天皇の血筋は男系では途切れたものの、雄略の皇女の春日大娘皇女が仁賢の皇后となり、仁賢と春日大娘皇女との間に生まれた手白香皇女が継体の皇后となり、欽明天皇を生み、現在の皇室まで続いている。

雄略天皇の陵を壊す話

顕宗天皇は父を殺した雄略天皇を深く恨み、その霊に報復しようと思つていた。雄略天皇の陵を破壊してその名誉を棄損しようと思ひ、人をつかわそうとした。その時兄の億計の命が「御陵を打ち壊

すのは私が行ってまいりましょう」と奏上した。億計の命は雄略の御陵の傍らの土を少し掘って宮に還りこう言った。

「すでに掘り壊しました」早く帰ってきた命に天皇は「どうやって壊したのか」と聞くと「陵の傍らの土を少しだけ掘りました」と言う。天皇は「どうして少しだけ掘ったのか」と聞くと命は「父王の怨みを晴らすために復讐しようと思うことは理にかなったことです。けれども雄略天皇は父の怨敵であるとはいえ、我々の大叔父に当り、しかも天下を治めた天皇なのです。父の敵というだけで天皇の陵を壊したとすれば後世の人は必ずこれを非難するでしょう。だから陵のほつりを少し掘ったのです。この恥辱を与えたことによって後の世の人に報復の志を示すことを十分果たせたと思います。

「なるほど道理である。それで良い」と天皇は仰せになった。

仁賢天皇（億計）弟顕宗天皇のあと即位した。皇后は雄略天皇の皇女、春日大娘皇女である。五十一歳で崩御。

飯豊皇女 市辺押羽皇子の皇女（あるいは妹）である。清寧天皇死後、一時政治を行った。女帝の先駆的存在である。

武烈天皇 実在していたかどうか議論がある。

継体天皇の登場

子供のいない武烈天皇が亡くなったときには王位につける人物がいなかった。そこで大伴金村大連は丹波国桑田郡在住の仲哀天皇五世の孫倭彦王を迎えようとするが、王は恐れて逃げてしまう。翌年金村は物部麁鹿火（もののべのあらかい）大連らと諮って、応神天皇の五世の孫の男大迹王（おおどおう）を越の三国（福井県三国）から迎えたという。これが継体天皇である。琵琶湖周辺の近江町辺りを拠点とする息長氏の出身と考えられる。書紀によれば、王にはすでに八人の妃がいた。近江が五人、尾張、ヤマト、河内が各一人である。息長氏の勢力圏である近江、尾張の勢力と結んでいたこととなる。

息長氏の重要な役割

ではなぜ男大迹王に白羽の矢が立てられたのであろうか。男大迹王の出身豪族である息長氏はただの地方豪族ではなかった。しかし、記紀ともに男大迹王を応神五世の孫としながら、その中間の系譜を欠いていたことから、信憑性に疑問が持たれたが、その後、「釈日本紀」（鎌倉時代の日本書記の注釈書）に引用された「上宮記」という「書紀」より古い文献に、応神天皇と男大迹王の間の系譜が全て記されていることがわかり継体以降の王家は、母系を通じて「応神王朝」の血統を引きつぐことになったのである。

朝鮮半島の情勢

六世紀になると、半島情勢は大きく変わる。新羅の台頭と百済の南進策によって、倭国の半島での拠点があった加耶諸国が次々と両国に併呑されると、倭国はすぐさま「任那復興」（金官国の独立回復）を画策し、加耶諸国が完全に消滅した後も「任那復興」に執念を燃やし続ける。

六世紀の半島情勢で、先ず最初に特筆すべきことは、新羅の日の出の勢いの台頭である。高句麗・百済両国の戦闘のすきに乗じて、百済が高句麗から奪回した漢城（ソウル）をさらに奪い取り、両海

岸まで領土を広げること成功する。こうして新興国新羅は、たちまちのうちに高句麗・百済と肩を並べ、さらには両国をしのぐほどの国力を蓄えるまでに発展する。新羅は、華々しい国力伸長の過程で伽耶方面にも進出していく。それが、伽耶と深い係わりを持つ倭国にも大きな影響を及ぼすことになるのである。六世紀初頭の朝鮮半島では、日の出の勢いの新羅と南方に活路を求めようとする百済が東西から伽耶（任那）に迫りつつあった。

任那四県割譲事件

雄略の時代、四七九年、百済の末多王が熊津（くまなり）で即位し強固な王権をうちたてた。高句麗と新羅の戦いの時には新羅に加勢して南方にも領土を広げた。ところがこの王は専制的権力を振るったので人臣を失い、五百一年に殺害された。次に即位したのが武寧王である。この王もさらに南方政策を推し進めた。そうすると、日本の勢力の及ぶ任那諸国との間に摩擦を生じることになる。

百済武寧王は五一二年（継体六年）使者を日本に送ってきた。任那の上哆唎（おこしたり）、下哆唎（おろしたり）、娑陀、牟婁の四県の割譲を日本に求めてきた。これはいずれも全羅南道の土地ではあるが、百済はそれが自分の領土であることを認めてほしいと言ってきたのである。しかも、日本がさきに哆唎に派遣していた穂積臣押山は現地での状況判断として、四県は百済に隣接するのに対して、日本からは海を越えた遠隔の地であるから、いずれは百済の領土になるであろう。むしろ割譲に喜んで応ずるのが両国の将来の交わりを固くするゆえんである、と進言してきた。これに対して朝廷では、継体の皇子の勾大兄のように強く反対する者もあったが、実権を握る大伴金村の強い主張によって、朝廷は結局、百済の求めに応じた。ただ世間には押山と金村が百済から賄賂をうけとったという噂が流れた。これが任那四県割譲事件である。

筑紫国磐井の叛乱

九州筑紫方面に勢力を持った磐井という男がいた。

この男が大和朝廷に弓をひいて叛乱をおこした。その原因は任那四県割譲事件である。

任那の百済に対してだけの割譲は、併立している新羅にとっては不満であった。新羅は軍を動かして任那の東部にある南加羅・喙・己吞を併合してしまった。大和朝廷は新羅を討つため近江毛野臣（おうみのけぬのおみ）に兵六万を与えて出発させた。磐井はこの征討軍を朝鮮半島に渡らせず、この大軍と一戦を交えたのである。磐井は新羅に味方して大和朝廷を敵にまわしたのである。日本書記によると、磐井は朝鮮半島からの朝貢品の取り扱いの職にあつたらしい。新羅から賄賂をもらった磐井は火の国、豊の国の二つの国を奪って大王に仕えようとしなかった。又朝鮮半島の内情に精通していた。任那の分割が百済、新羅に平等に行われたならば紛争の種にはならないが、百済だけへの援助は必ず新羅の恨みを買うに決まっていると言うのが磐井の判断である。しかしその考えは朝廷には受け入れられず、新羅の任那南部への進出となった。朝廷の軍が新羅に渡るのには北部九州を通らなければならないし、九州の軍の協力も必要とした。大伴金村と物部麿鹿火が率いる朝廷軍は九州に踏み込めず、磐井討伐戦になった。朝廷は磐井を討つことはできたが、南朝鮮への支配力は弱まってしまった。五六二年、任那は新羅に併呑され滅亡した。その後、磐井の子である筑紫君葛子は父の罪に連座させられることを恐れて朝廷に糟屋屯倉（かすやのみやけ）を献上して死罪を免れた。

継体天皇の時代には、この二つの大事件があった。この結果、朝鮮半島に対する支配力が落ち、日本の支配地である任那の滅亡へ向かって行った時代でもあった。